

九州大学 YMCA 100 周年記念講演 「平和をつくる」

中村 哲

皆さん、こんにちは。私は学生時代は学Yの会員の1人でして、今日は懐かしい顔に色々巡り会って、同窓会にでも出席したような楽しい気分しております。それと同時に、若い方々も多いので、この集まりを通して、また新しいエネルギーが生まれてきたらいいなという気持ちで、私も参加させていただきました。題は「平和をつくる」ということですけれども、5、6年前から、その前からもそうだったんでしょうけども、世の中だんだんきな臭くなってきまして、平和、平和と言ったって、なんとなくみんな危ない方に流れていくという中で、私たちが果たす役割は何なのか、そして私たちは平和をつくるためにはどうしたらいいのか、ということを考える材料にさせていただけたらと思います。100周年ということで、そうなればなるほど、考え方が融通が効かなくなるんですけども、つい最近の若いもんはと言いがちになりますけれども、100周年を契機に若々しくなって、元のような活発な、今でも活発でしょうけれども、もっと活発な学生のYMCAの活動が展開されることを祈っております。

私の話は、金太郎飴のような話で、何遍もお聴きになられた方もいると思いますけれども、この数年間特にアフガニスタンで、何が今起きつつあるのか、何が起きたのか、皆さんおそらくご存知ない話も混じえて、会の歴史二十数年を紹介させていただきたいと思います。《映像上映》



3年前の映像ですけれども、仕事そのものはですね、ほとんど変わらず続けられています。今日初めておいでになった方はちょっと手をあげてください。半分くらいおられますので、2回目以降の方は退屈かもしれませんが、簡単に私たちの会の発足からいままでの働きを紹介したいと思います。

名前の通り、ペシャワール会というのは、パキスタンの北部にありますペシャワールという、アフガニスタンとパキスタンの国境の街を拠点といたしまして、両国にまたがって活動を続けております。いくつかですね、皆さんに知っておいていただきたい、私たちの活動を理解する上で大切な点をあげますと、なぜ私たちが国境をまたがらざるを得ないかということで、何も国際貢献ということじゃなくて、この地域アフガニスタン東部とパキスタンの北西辺境州はほとんど同じ、関東と関西の違いしかないということです。アフガニスタンの人々は、首都カーブルを上之都、北西辺境州のペシャワールを下之都とよんで、ほとんど区別なく自由に往来をしている地域です。この地域一帯に住む多数派民族はパシュトゥン民族と呼ばれる、2,000万人以上の民族であります、その半分ずつが国境に分かれて住んでいます。ペシャワール周辺の事情と言うのは、これは日本人にはわかりにくいと思いますが、実態は、乱暴な割り切り方をすると、アフガニスタンの一部ですけれども、行政上はパキスタンに組み込まれておるといって、微妙な政治的な位置にありまして、私たちの活動は現地事情に沿って、両国にまたがらざるを得ないという訳でございます。

根幹となるのは医療事業でありまして、これは現在でも継続されておりますが、皆さん忘れられておるのでご存知ないかと思いますが、現在アフガニスタンにおける軍事活動はますます拡大しています。私たちの大事な診療所でありました、2つの奥地の診療所、ワマ・ヌーリスタンの診療所とダラエ・ピーチという山奥の診療所は米軍の軍事作戦地域になりまして、撤退を余儀なくされる事態に陥りました。新聞など見ていると、いかにもアフガニスタンは民主化されて、落ち着いたというような印象を与えますけれども、これはまったくの錯覚であると、私は断言したいと思います。その証拠に、空爆中でさえ自由に行けたのに、昨年今頃から2つの診療所を放棄しなければならないほど、軍事活動が拡大したというのはまだ知らされていないと思います。ともかく、私たちの活動は医療活動を根幹といたしまして、これに携わる従業員は百数十人、さらに水源確保事業、これも後で話しますけれども、これが百数十名、その作業員、臨時作業員も含めると一千名くらい、私たちと一緒に仕事を続けております。

案外知られていないのは、アフガニスタンは山の国だということです。東のヒラヤマからずっとカラコルムに続きまして、世界の屋根の西側を作っているのはこのヒンドゥ

クシュ山脈でありまして、最高峰は7,708メートル、ティリチミールという山ですけれども、非常に雄大な眺めですけれども、アフガニスタンはほとんどこのヒンドウクシュ山脈で占められている山の国だということは、案外知られていない。だから、アフガニスタンの特殊の事情というのは、まずこういう地理的な条件でありまして、谷と谷が深いので、地域と地域がカットされやすい、悪く言えばまとまりがない。別の見方をすれば、地域共同体は非常に強固でして、日本や欧米諸国のような国民国家は現地では誕生しようがない、という社会でございます。どうやってアフガニスタンという国が成り立っているのかといいますと、谷と谷、谷ごとに国があると言ってもいい。各地域の自治会に似ております長老会というのがあります。これは地域のもめ事から裁判まで、一切合切自分で統治する。文字通り、自治体の集合体がアフガニスタンと考えて差し支えない。この事情がよく伝えられない。日本に伝わってくるのは、首都カーブルだけの様子でありまして、学校が建ちました、病院が建ちました、教育が普及しましたというニュースばかり耳にしますけれども、皆がご覧になっているアフガニスタンの映像というのは、アフガニスタンの中でも非常に特殊中の特殊な場所である。まずはこれを知っていただきと思います。また、アフガニスタンの人口二千数百万人のうち、9割近くが農民及び遊牧民であるということ。現地の有名なことわざに、「アフガニスタンでは金がなくても食っていけるけども、雪がなくては食っていけない」。金がなくても食っていけるというのは、自給自足の村落共同体の割合がほとんどであるということ。ちなみに、アフガニスタンの食料自給率は、干ばつ以前の農村でほぼ100%近く自給自足ができた。日本の食料自給率とはずいぶん違う。つまり金はないけども、決して貧しいところではなかった。しかし、あの乾燥した中央アジアで、二千数百万の人々がどうやって食っていけるのかというと、まさに農民を養っているのはこの白い雪でありまして、冬に降り積もった雪、何万年もかけて作った氷河が夏に溶け出して、川沿いに豊かな実りを約束してくれると。何千年か何万年かわかりませんが、人も動物も植物もこうやって命をつないできた。ということで、アフガニスタンにとって、この山の雪というのは非常に大切なものなんですね。それがこの十数年、年々雪がだんだん薄くなってきている。それは地元の人にとって、戦争以上に恐るべきことであって、このまま放置すれば、20年を待たずして、アフガニスタンの半分の人口が生存できる空間が消失してしまうのではないかと、言われています。これについてはあまり触れられていないですね。これも頭において話を聞いていただきたいと思います。

国民の100%近くはイスラム教徒でありまして、もっとも古典的なイスラム教徒ですね。最近イスラム教と言いますと、原理主義だのなんだのという話が多いですね、何か

イスラムというものに対して、偏見をお持ちかもしれないですけども、現地に行きますと、そのへんを歩いているおじさん、おばさんとちっとも変わりません。日本人の方が怖いですね。私もキリスト教徒のはしくれでありますけれども、何か地元の人にとって大切なことがありますと、金曜日にモスクにいて、話をして、このハンセン病の患者がいじめられたりすると、訴えるということが出来るんですね。私は堂々とクリスチャンだと言いますけれども、それでもって白い目で見られることはほとんどありません。ともかく各地域にはモスクがあって、先ほどアフガニスタンというのは谷ごとに国があると言ってもいいと言いましたけども、いろんな民族そして部族から成り立っているアフガニスタンを結びつけるのは、このイスラム教であります。これを連動した長老会というのは、自治体の要になってその地域を支配していると。その頂点に徳川幕府のように各自治体を治める政府がある、という構造ですね。首都カーブルが動いても、各地方が動かないとアフガニスタンは変わらない。これが実態でございます。

さらにこれは一般的なことでありますけれども、貧富の差が激しい。ちょっとした病気で日本や東京やニューヨークに飛んで行ける人がいるかと思うと、一方で99.999%の人が数百円といわず数十円のお金がなくて死んでいく人が数しれない。こういう世界でございます。私たちの耳に届いてくるのは、簡単に外に出ていける人たちの声が多く、英語が流暢で、ものの考え方も私たちとよく似ていて、説得力があるような話しをする人たち、こういう人たちの話が届きやすい。私たちの長年の活動を通じて、99.999%の人たちは何を考えているのか。やはりこの雲の上の、外国人と接する人たちとは全く違う考えをしている、ということは知られていないと思います。私たちとしましては、いかに少ないお金で、いかに多くの人々に恩恵を及ぼすかという、特別な配慮をせざるを得ない世界であるということですね。

私の活動は1984年、JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）からペシャワールのミッション病院のらい病棟に派遣されたことから始まりました。私の最初の任務は、当時登録されておりました2,400名の患者に対して、医療センターを充実させよということでした。行ってびっくり、この二千数百名の患者に対して、ベッド数は16床、この写真〔スライド〕にありますように、これが当時すべての医療機械でございます。ハンセン病の話は今日詳しくはしませんけれども、単に薬があれば治るということではなくて、いろんなケアが必要なんですね。整形外科、内科、皮膚科、神経科、リハビリテーションも含めて、総合的なケアが必要ですけども、これではとても治療できる状況ではありませんでした。押すと倒れる台が1台、足が1本折れているんですね。耳にはめると怪我をする聴診器が1本、ねじれたピンセットが数本。医療はモノや金ではないという人

はたくさんいますけども、モノや金だけではないというのは正しいと思いますが、なんがなんでもこれは酷すぎるということで、ペシャワール会の活動が活発化しました。

20年を経た現在、病院が建ち替わりハンセン病計画も潰れた。というのはですね、このハンセン病もアフガン問題と同じで、話題になる時は人もモノも金もWHOが一声かければバーっと集まりますけども、ひとたび関心が薄れますと、皆さ一つと引いていく。その一方で、ハンセン病は増えつづける一方という状態は、少しも解消していない。周りを見渡してみますと、あちこちの団体が撤退して我々だけとなった。人がやらなきゃ我々がやらざるを得ないだろうということで、このハンセン病診療というのは、この病院の診療の要になっておりまして、ずいぶん20年をかけて改善されました。こういう写真〔スライド〕を見ますと、たしかに私が医者で立派な医療活動をやっているように見えますけども、私たちのエネルギーのほとんどは、一見医療と関係ないところにずいぶんのエネルギーを注いできた訳でございます。

その一つは、地域の人々、また我々の立場から言いますと、相手である患者の気持ちをどう理解するかということなんですね。これはなんでもないのでありますけども案外大変なことで、日本でも患者の気持ちを理解できないがために医療訴訟が起きたり、とんでもないマニュアルだけで診療するようなことが起きている訳です。診療される方がどういうことで怒り、どういうことで悲しみ、どういうことが楽しいのかがわからないと、臨床医療は成り立たないですね。それを理解する二十数年だったと思います。たとえば、現地の女性の被り物に対しても、外国人の犯しやすい過ちと言いますのは、単に相異であるものを、善悪とか優劣の範疇に分けて考えてしまう。女性にこんな被り物をさせるのは野蛮だと、許すべからざる人権侵害だということで、地域の文化が糾弾される。これはいいものでも悪いものでもなくて、我々がメシを食ったり、味噌汁をすすったりするように、現地の人々にとっては普通の女性の外出着ですね。私たちとしては、本当に女性のことを心配するなら、あなたが連れて行って面倒をみてくださいと言いたい。そこでずっと継続して面倒をみざるを得ない家族や我々はどうしたらいいのか。とりあえず、その地域の文化、慣習に関しては、いいとか悪いとか優れているとか劣っているというものじゃなくて、好き嫌いはあるでしょうけども、地域の文化に則った形で活動を展開することを鉄則にしてきました。このために始めはこれだけは頼らざるを得ないだろうということで、日本から女性のワーカーがずいぶん送られてきた。彼女らの働きによりまして、今まで疎かにされてきた女性の診療が充実するようになりました。私たちとしましては、如何に相手を理解するか。なにも私たちは社会運動をして文化を変えてしまえということはない。そのまま受け入れて、それに則った形で、この制約

された状態の中で、患者に準備できる最大のもの、最大の幸せの状態は何なのかを探って、それを準備する。それが医学の基本ではないかと、私は思っております。

私が参りました1984年は、アフガニスタン戦争の真っただ中。1979年の12月、私が赴任する5年前、当時世界最強の陸軍と呼ばれたソ連軍10万人が共産政権を擁護する名目で侵入しまして、その10年後、ソ連軍が撤退した。その間、人口の十分の一に相当する200万人が死亡し、さらに600万人が国外に逃れる、難民化すると、最悪の事態になったのです。パキスタンに300万人の難民が流れ込んでくる。それも先ほど言ったように、パキスタンの北西辺境州には同じ民族、言語の人たちが住んでいまして、難民というより民族移動に近い。親族を頼って続々と難民化する事態となった。私たちも医療の立場から、勢いこれに飲み込まれていったわけでございます。

はじめは難民キャンプで診療を続けておりましたがけれども、私たちはここで方針を大転換した。ハンセン病だけを見る診療は現地では成り立たない。例を挙げますと、大変な病気にかかったある患者に、「かかってよかった」と言われて、なぜかという、普通の病気ではこんなところまで運ばれない、ただで飯を食え、医者に診療してもらって幸せだということを知りました。まさにその通りだと思いました。ハンセン病だけを見るというのは、現地では絶対にできない。ハンセン病が多いところは、同時にほかの伝染病も多い。腸チフス、結核、マラリア、デング熱、アメーバ赤痢、ありとあらゆる伝染病の巣窟でありまして、あなたはハンセン病じゃないから診ませんとは、死にかけているマラリア患者には言えないですね。患者はたいていアフガニスタンの山奥の貧しい村の出身でして、ハンセン病多発地帯は同時にほかの感染症多発地帯でして、かつ医療機関はほとんどないというところでもありますから、将来的に、本格的にこのハンセン病の患者を減らすためには、アフガニスタンの山奥に診療所を開きまして、一般の病気も見ながら、ハンセン病の患者も伝染病の一つとして特別扱いせずさりげなく診ると。こうやって偏見も避けよう。このハンセン病の診療と同時に、アフガニスタンの農村部におけるモデル診療の確立ということも、もう一つの柱とするようになりました。

そのために1986、1987年ごろから、らい多発地帯、すなわちアフガニスタンの山奥の診療所開設予定地だったんですけども、そこで信頼関係も深めていきました。当時内戦の真っ只中で、戦場は農村という中で、ずいぶん仲間も失いましたけれども、表むき国境は閉鎖されておりますけれども、アフガニスタンとパキスタンの2,400キロメートルの国境は絶対に閉鎖しきれない。決して私は頭は強くはありませんけれども、足だけは強いので、山から山へ、谷から谷へと渡りながら、地元の人々との交わりを深めていったわけでございます。

これ〔写真〕はヌーリスタンと呼ばれる最も高地に住む民族の居住地で、ペシャワールから徒歩とジープで片道一週間はかかった。しかし知っておいてほしいのは、こういうところがアフガニスタンの大部分を占める地域であるということ。道路のある方は、まだましな方であると。一時空爆中にですね、アフガニスタンはいかに惨めかとか、圧制が敷かれているとか、テレビが禁止されているとか、タリバン政権によって言論統制されているとか、一般的な理解として日本でもまかり通っていました。私に言わせれば、第一電気がないのにどうやってテレビを見るの？と（会場 笑）。テレビは高価なものですから、ほとんどの人は、たとえ電気が通ってもテレビは買えないですね。大都市も時間配電で、地域の大体2、3%の人しか電気を利用できない。こういうこともあまり伝わらなかったわけですね。皆がデモクラシーだの、民主化だの言っているとき、人々はこういうところで貧しい生活をしとったわけでございます。

この村〔写真〕に行ったときに、私はすごく歓迎されまして、「フランス人ですか」って聞かれたんですね。村長さんが言うには、「あなたがこの村にやってきた最初の外国人だ」と。今まで中国人か日本人かという質問はありましたけれども、フランス人かと聞かれたのは生まれて初めてですね（会場 笑）。後で知りましたが、実は私がこの村にやってきた最初の外国人。村長さんがたまたまフランスという国を知っていたので聞いてみると、日本人ですというと、手のひらを返したように親切になる。そのわけも後で知りましたが、とにかく単に日本人というだけでもって、半分外国人でないような扱いをしてくれた。そのために、命拾いをしたことは数知れなかったし、そのために、仕事がうまくいったこともたくさんあったわけですね。今日のタイトルは「平和をつくる」ということですが、それを考えますと、最近では対日感情がだんだん悪くなってきました。私たちは顔見知りですからいいですけども、単に日本人であるがために攻撃の対象になることも、少しずつ一般化しつつある、ということも知っておいてもいいんじゃないかと思います。

1986年になって、ソ連軍が撤退を開始します。翌年この撤退が完了しますけれども、当時世界中に報道されまして、アフガン空爆の時以上に世界中で騒がれました。世界中から多くの団体が入ってきて、さあ難民が帰ってきてアフガニスタン復興が始まると、華々しく始まりましたけれども、それが91年になって湾岸戦争が始まると、関係援助団体は本当に逃げ足が早いですね。あっという間に消えてしまった。これによって帰った難民はほとんどいなかった。これによってアフガニスタン難民は、外国人に対する不信を決定的にするわけでございます。外国にとっては危険地帯だから行くなという。しかし本人たちにとっては、来てほしいというのに来ない。地元の人たちの声を代弁し

て言うならば、外国団体というのはどうせ新聞記者と一緒にやってきて、新聞記者と一緒に去っていくのさと。結局自分たちのことは自分でしなくちゃいけない、というのが99%の人々の声でありまして。皮肉なことに翌92年になって、共産政権が倒れますと、当時地方に散らばっていた政治党派、アメリカの武器援助で太っておった反ソ連軍のゲリラ組織が、今日の都カブルを目指して続々と攻め登った。そのため町の人には気の毒ですけれども、農村は平和になり、兵力が集中したカブルをはじめとする大都市が戦場になるという事態になって、大部分が農民でありましたアフガニスタン難民たちが、自分たちで一斉に故郷を目指しはじめたのが1992年の5月。なんとこの92年の5月から同じ年の12月までのわずか7か月の間に、UNHCRの発表によりますと、当時おりました270万人のアフガニスタンの難民のうち、200万人がほぼ独力で帰ったと、伝えられました。これによってですね、結局、自分たちのことは自分たちでしなくちゃいかんというのが、当時の一般的なアフガニスタン人の感覚だったと思います。

私たちもですね、この難民が帰ってくると、診療所を次々と開設しはじめて、今休止になった診療所は二つありますけれども、今の診療所はすべてその当時作られたものであります。そうこうする内に15年経ちまして、こりゃあ先が長いと。日本のハンセン病問題でも、一世紀以上の時間がかかっておりますから、まして外国人がぱっとあんなところにいって、調査するだけでも何年もかかるところで、いわゆる研究活動やらボランティアで何か月間だけではおさまらないだろうというのは、私たちの基本的な観念であります。誰でもいいからともかく、馬鹿みたいに、一つのことを追いつづける、ハンセン病の診療施設が地元にいるんだということで、15周年を機会に、ペシャワールに社会福祉法人として土着化すると。PMS（ペシャワール会医療サービス）という機関をですね、単にペシャワール会の出先機関というのではなくて、現地の活動母体として自前の病院、自前の現地組織として、現地に根を降ろして活動する団体となったわけでございます。

これからというときに、アフガニスタンというのは本当に運が悪い、襲ったのは世紀の大干ばつ、これもほとんど皆さんに知らされてませんでしたけれども、先ほどお見せしました山の雪がしだいに消えていく。実は十数年前からこの現象は起きておりましたけれども、気候があつたかくなってきたために、春先にそれまで少しずつ溶けてきた雪が急激に溶けだします。洪水は増えたけれども、干ばつも増大する。これが一挙に露わになったのは2000年の末のことでありまして、当時WHO世界保健機関の発表した数は危機迫るものがあった。現在進行しているユーラシア大陸の大干ばつは人類が至上体験したことのないようなもので、その中で最も激しい被害を受けたのはアフガニスタン。

人口の半分を上回る 1,200 万人が被災して、500 万人が飢餓線上、ごはんが食べられないということですね。さらに 100 万人が餓死線上にあると、もうすぐ死ぬということですね。と呼びかけをしたけども、当時これに応じた国際団体はほとんどなかったということは知っていただきたい。政治問題はとやかく言われるけれども、人々の命の根幹を握る食糧、食べ物にかかわること、水にかかわること、環境問題、これはほとんどこの、グローバリズムだの国際主義だのと言ってですね、地球上、皆仲良くしなきゃという世界の中で、こんな人の命を握るようなことは、大きな話題として今まで取り上げられなかった。ということに私は非常に憤りを持っています。当時 2000 年の春以降、診療所の周りから、本当に村が次々と消えていく。当時の、これも WHO の発表によりますと、家畜の 9 割が死滅するという状態でありまして、人々は家畜が死ぬ前に、家畜もお金になりますから、町に持って行って売る、村を離れて親戚のところにも身を寄せる、さらにパキスタンやイランに難民となって逃れるという難民が続出しました。これは未だに続いていることを私は今日、強調したいと思います。アフガン空爆で、デモクラシーと自由がやってきたから、皆の暮らしが楽になったと、絶対にそんなことはない。この干ばつ対策が行われない限り、この難民化というのは続く。その証拠に、2001 年の 10 月になって、アフガン空爆が行われ、翌年の 2002 年のアフガン復興東京会議でもって、教育支援だの、自由とデモクラシーをもたらして、アフガニスタン国民の幸せになったと。何となくこのいかがわしい錯覚が世界中で通用する。私たちが始めから言っていたのは、難民というのは、食えなくなって逃げてきた農民たちなんだと言いましたけれども、それはほとんど受け入れられなかった。しかしそれは今でも続いておると、声を大にして強調したいと思います。何よりも UNHCR、国連難民高等弁務官事務所の数字が雄弁に物語っている。2002 年の東京復興会議の後、パキスタンの 200 万人の難民のうち、一年間で 140 万人が帰したと言った。200 万人引く 140 万人は 60 万人のはず。ところが、昨年夏発表された UNHCR の発表は、さらに 300 万人の難民がいるのでまた帰還計画を立てると。毎年何百万人を帰してなぜゼロにならないのかと。この問題は調べてないということなんですね。それは意図的なものなのか、たまたま無頓着なせいかは知りませんが、実態はこの砂漠化というのは少しもおさまっていない、ということに皆に訴えたいと思います。

ともかくこの餓死の末期といいますのはですね、飢え、餓死といいますけれども、高齢の方はご存知かもしれないけれども、敗戦直後のあの日本。お腹がぺこぺこで路上でばったりゆきだおれになるというような餓死は案外少ない。末期というのは大抵この栄養失調にかかりまして、抵抗力が弱くなると。そこに簡単な下痢症。大抵水がないと、

生活排水、汚い水も飲んでしまう。そうすると、子どもは簡単に赤痢になってころりと逝ってしまう。これが大体多かった。私たちとしては診ても診ても、次々と子どもの犠牲者があらわれる。ときには何日も歩いて若いお母さんたちが、小さい子どもをしっかりと胸に抱えてやってくる。まだ診療所にたどり着く方はいい方で、たどり着いても外来で待っている間に、子供がお母さんの腕の中で冷えていく光景は普通に見られています。

私たちとしては、抗生物質を 100 万人分準備するよりも、井戸一本の方がまだましだということで、残った村人たちを集めて、診療所付近で井戸を掘りました。これは現在も活動を続けております。現在は約 1,400 本の飲料用水源を確保して、三十数万人の村人がですね、少なくとも自分の村で暮らせるという状態を作っております。

〔写真〕続いてこれは伝統的な灌漑用水路である、カレードと呼ばれるものです。要するに、地下水を利用した灌漑用水路ですけれども、飲み水だけでは食ってはいけませんので、ほとんどは農民、農村社会の中でまず自分で耕せる灌漑用水の確保をします。狭い地域でありますけれども、力を尽くしました。

〔写真〕これは 2000 年 9 月 15 日、私の誕生日ですからよく覚えています。これが診療所付近の様子でありまして、2、3 年前まで緑豊かな水田地帯であったことを思わせる形跡はありませんでした。こういうところに、早めに用水路の水を注いであげますと、どうなるかといいますとこの 7 か月後。〔写真〕これは同じ地域ですね、違うところを撮ってるじゃないかと言われました。まさしく同じところでありまして、私たちが哀れな難民のために助けてあげなければという以前に、そこで人々が自分たちで暮らせる条件を整えますと、自然に難民は帰ってくる。診療所周辺約 1 万人の住人は自発的に帰ったものでございます。こうやって、私たちは灌漑井戸を掘ったり用水路を掘ったりしながら、始めから砂漠であったのではなくて、豊かな田園が砂漠化した地域に緑に回復をするという仕事が進められておりまして、私たちは農業用水路の確保にも力を注ぎました。

私たちが期待していたのは、こういう悲惨な状況が世界で話題にならないはずがないと。誰も帰らなかった難民帰還援助でも、たくさんの団体が押し寄せたくらいですから。どこか大きな団体、国際援助が来るだろうと思ってたら来たのは援助ではなくて、国連の戦車。2001 年の 2 月、前年のペルシャ湾岸の自爆テロで、米軍の駆逐艦が大破するという事件がありまして、これに対する報復措置として、ロシアとアメリカが音頭をとりまして、アフガン制裁を決定する。会場の皆さんがお腹がペコペコというときに、この中で犯罪者が紛れこんでるんで会場を閉めます、水も食べ物もあげません、というふうになったらどうなるのか。国民にとってわけわからないのに、何で俺たちがやらなく

ちやいけないのかという思いが強くなってくる。この周りで 100 万人が死ぬという中で、食糧まで制裁しようとした。というのは人々にとって忘れ難い思い出となりました。

さらに、9月11日のニューヨークのテロ事件によりまして、翌日からアフガン空爆ということが言われます。普通の人には何のこともよくわからない。ビン・ラディンという名前は有名でしたけれども、アフガニスタンは保守的な国でありまして、国際運動とはほとんど関係がない人たちばかり。しかも大干ばつのまっただ中。難民になれる人はまだまして、カーブルは明日の米をどうすりゃええかという人たちが溢れかえっておった。そこに爆弾が降り注がれた、ということは皆さん思い起こして知っておいていいことだと思います。あの当時ですね、ピンポイント攻撃だの、テロリストだけを倒す人道的な爆弾だの、軍事評論家が事もあろうにまともに議論をすると、日本がこれにおおきく巻き込まれたことは、私にとっては非常に残念なことでございます。ともかく私たちとしては、戦争どころじゃないんだと、みんな明日の米をどうするかで困ってるんだと。今空爆が始まったらカーブル市民の 1 割は生きて冬を越せないだろうということで、1,850 トンの小麦を送りました。飢えた人々、死にかけた人々、十数万に対して冬を越すための食料が届けられたのは、嘘のような本当の話でございます。

次に、自由とデモクラシーの勝利。タリバン政権が消滅いたしまして、米軍に支援された北部同盟軍と米軍が入ってくる。繰り返し繰り返しもう止めてくれと思うほど流された映像が、この米軍を解放軍として歓呼の声で迎えるカーブル市民の様子が、嫌というほど流される。地元にいる我々自身もですね、どんな敵が来るか分からないときに、旗を 3 つくらい持ってるんですね（会場 笑）。ロシア軍が来ればロシアの旗、米軍が来れば米軍の旗、要するにあなた達とは銃火を交えたくありません、というただの意思表示にすぎなかった。それが歓呼の声で迎えるカーブル市民達という映像として流された。ブルカを脱ぐ女性達、自由の象徴、女性解放。しかしそれならなぜソ連を助けなかったのか。ソ連も同じことをやって失敗したじゃないか。ということが暴力的な形で再びやられたということについて、一般の庶民であります農民達は冷ややかな目で見ているのが実情でございました。いろんなものが解放されまして、[写真] これはケシ畑でありますけれども、いまやアフガニスタンはほぼ消滅に近かった麻薬栽培が、タリバン政権の崩壊後、世界の麻薬の 9 割以上を供給するという不名誉な地位に転落しました。解放されたのは麻薬栽培の自由。女性がブルカを脱いでもいい自由も解放されましたけれども、脱ぐ人はほとんどいなかった。実際に増えたのは女性が物乞いをして食っていく姿。あるいは、女性が売春をする自由が増えた。そして、あの保守的なイスラム社会で、西洋的な肌を露出した風俗が首都カーブルで行われるとなると、昔の古き良きアフガニス

タンを知っている人にとっては面白くないという事態が頻発しております。そのため爆撃、爆破事件が絶えないという自体になっております。ちなみに昨年のアメリカ兵の犠牲者だけで、100人以上がアフガニスタンで殺害されました。さらに地元の米軍協力者の人々は、その10倍以上が死亡しておるということは、皆さんおそらくご存じないと思います。これが自由とデモクラシーの結末であったと、皆さん多少は知っておかれてもいいじゃなかろうかなと思います。私たちとしましては、ロシアが来て帰って行ったじゃないか、その後いろんな党派が来て支配したけど潰れたじゃないか、だからアメリカもそうなるんじゃないか。カールがどうなろうと我々のスタンスに変わりはないということ、住民達に再び説きまして活動を継続してきたのであります。

アフガニスタンは農業国家でありまして、自給自足できる農村の回復、すなわち昔のアフガニスタンを回復したい。アフガニスタンの食料自給率は、100%近かった過去の時代もありましたが、昨年の統計では60%に落ち込みまして。さらに今年はずね、雨が降らない雪が降らない暖かいと、異常気象が続いております、小麦の大凶作が予想される。おそらく食糧自給率は半分以下に落ちるだろうと言われております。その中でまず食っていくことが先なんだということで、試験農場、これは乾燥に強い作付けでして、現在は3年たった今、サツマイモが割といけるという感触をつかんでおります。そして牛の飼料の研究でソルゴ、アルファルファを広めたいと今やっております。また、お茶にも手をつけて、麻薬が小麦の約100倍の値段で取引されるので、貧しい農民達はいま麻薬を作ってしまうのです。それに代わるものとしてお茶の栽培を広めつつあります。

これは元々砂漠ではなくて、3年前の写真ですが、元々多少は水があって畑だったところが、今は砂漠みたいになっています。こういう所を再び農地にして、井戸だけでは足りないので、総工費8億円をかけまして14キロメートルの水路の建設に取りかかったのが3年前。現在はこの地域だけで約70町歩ありますけども、全域が水田と化しております。さらにその10倍に相当します700町歩が昨年の4月から水の恩恵を受けられるようになりまして、この用水路によって700ヘクタールが灌漑されるようになりました。さらにこの水路が完成いたしますと、この7、8倍、上手くいけば10倍近くを潤せるということで。現在の私たちの活動は、医療はもちろん行いますけども、いかにしてみんなが生きていけるか、そのための水を取り戻す、この荒れ野を緑に変えることをもって一番の大きな事業としております。田中正造ではありませんけども、

うっかり眺めておればただの原野
涙を以て眺めれば難民達の群れ
氣力を以て見れば竹槍
臆病を以て見ればただ病氣のみ、

(以上の毒野も、うかと見れば普通の原野なり。涙を以て見れば地獄の餓鬼のみ。
氣力を以て見れば竹槍。臆病を以て見れば疾病のみ——田中正造【編集者注】)。

という状態でありまして、私たちは竹槍は使えませんけれども、向こうの人は非常に現実的で事実しか信じませんので、ともかくこの荒野を緑化することによって我々の力としようということで、事業を展開しております。

〔写真〕今、丁度この現場に取りかかっているところでありまして、もうすぐ目的地まで着きますと、約5,000ヘクタールの灌漑が可能になります。その際に気をつけなくちゃいけないのは、地元の人でも維持できるようなものということです。〔写真〕これは小さいですけども、単に盛り土をして樹を植えて、柳の木が多いですね、それで地面を保護する。これだと決壊しても、土嚢を積み上げて柳の木を挿せばそれで出来上がりです。日本みたいなコンクリート固めにしてしまうと、それは修繕するのも大変だと、地元の人が自分で管理できないということです。出来るだけ地元の人たちが自分達の手で管理出来るものを、というのを一つのコンセプトにしています。

その際、役に立ったと思われるのが日本の農業土木技術、と申しまして近代的な大金をはたいて作ったコンクリート施設ではなくて、江戸時代、戦国時代から行われてきた日本の農業土木技術でございます。〔写真〕これはですね、九州は筑後川、筑後川は朝倉郡の山田堰というところがありますが、この現場の斜めの取水口は、山田堰のコピーでありまして。これによって、春夏秋冬一定した水量の治水が可能となりまして、昨年の大洪水でほとんどの川沿いの取水口が壊滅する中で、我々の水路だけが生き残って、これは日本の農業土木技術は素晴らしいものだと思います。

〔写真〕さらに蛇籠。これは最近日本でも少し見直されております。日本では昔の川への郷愁から、多様な生物が住める環境を作るため使用されておりますが、元来これは、コンクリート仕事よりも安くて丈夫なんですね。この護岸のために蛇籠を使用いたしまして、今まで約350トンのワイヤーで、一万個以上の蛇籠が生産されました。

〔写真〕これは取水口で、基本的に激しい流れが当たるところは、現在もすべて蛇籠にしております。土木作業員などをしております。医者の仕事はあまりしなくなりまし

た（会場 笑）。

〔写真〕米軍が通っていきます。私たちの活動地は米軍の軍事活動地域でもありまして、道路会社の人々が、兵隊に物々しく守られてこの道路、米軍の軍用道路に近い道路ですね、の工事をしておる。私は丸腰ですけれども、一回も地元の人から攻撃を受けたことはない。時々米軍が機銃掃射を我々にして通っていく。抗議いたしますと、「我々は気が立ってるんだ」と「怪しい者を見つけたら攻撃をしてから確認をするんだ」と言うんですね。それは逆じゃないかと、確認してから攻撃しないと誤爆になるんじゃないかと、日本大使館に抗議の声を出したことがありましたけれども、それは握りつぶされました。まあともかく私たちとしては、今日はいみじくも「平和をつくる」というのがタイトルですけれども、平和は武力によっては達成されないというのが、私たちの確信でもございます。

実際、道路工事をしておった請負の外国人が今まで何人殺されたか。トルコの会社だけで十数名が誘拐、殺戮された。これは米軍の手先とみなされたということで、さらに、撤退いたしましたトルコ系の会社からインド系の会社に代わりまして、この半年間の内に、私が覚えているだけで3件の誘拐事件がありまして、いずれも死体となって見つかっております。その中で我々はあんなに何でもなくやってるけれども、武力に守られる支援というのはあり得ないんだというのが、私の現地にいるの実感でございます。

〔写真〕こういう綺麗な石組みをするのは、実は技術者でも何でもなくて、周囲の農民達そのものなんですね。この水路は、決して進んだ国の進んだ技術で、高度の技術を使って出来上がったものでない。その辺に誰でもいるようなお百姓さんたちが、彼らは石組みが日常ですから、石組みの芸術家でもある。さらに、この運転手は技術者でもあるということで、こういう人たちと立派な水路が出来るということを、一つの誇りとしたしております。

〔写真〕これは昨年の写真ですが、2年経ちますと、柳というのは不思議な樹で、護岸に植えた柳の根っこが、本当に絨毯のように川底を覆うんですね。水路が崩れましても、柳が針金の代わりになってしっかりと石を支えてくれるということで、おそらく100年はもつんじゃないかと、私たちは思っております。〔写真〕天災、人災といろいろありましたけれども、川の流れが変わって決壊しそうになったときに、護岸をせざるを得なくなりまして。これも日本の技術で、石出し、水制という技術で、これでかろうじて川を守ったということもありました。

〔写真〕これも八代の十連樋門のコピーですね。こうやって、もちろん現地にもないものも取り入れましたが、大抵は300年、400年前の日本の農業土木技術でありまし

て。私は、日本というのは進んだ国だなど、進んでた国だなど、改めて思っております。

〔写真〕これは、水道橋ですね。〔写真〕こうやって元の砂漠地帯が次々と緑化していくということは、これは非常に見ていて楽しいものなんですね。〔写真〕ここは、元は原野でした。今年の4月になってやっとこの原野一帯に水を通せるようになりまして、現在はこの麦畑で埋め尽くされておりまして、ここから見渡す限りの麦畑が広がっています。

出来ないことではない。出来ないもんじゃないのに、なぜやらないのか？という素朴な疑問でありまして。世界食糧計画という直接難民に携わっておる国連機関が、これを知らないはずはない。8億円といったって、我々にとっては大金ですけども、国家間援助に比べれば雀の涙なんです。それでなぜこのような事業が出来ないのかということの背景に、この先進国側の勝手な考え方、あるいは自分たちの都合が優先して相手を考えてない、という驕りを見ないわけにはいかない訳でございます。私たちとしては気力を以てこの原野を見ますけれども、実際にこの原野を豊かな緑野と変えまして、これを以て我々の竹槍とする。これを私たちの力にしたいと思っております。

〔写真〕悲惨なことばかりを申しましたけれども、いつも講演の締めくくりでお見せするのは、この一枚の写真。みんな暗い顔をして憂鬱な事ばかり起きているのかというと、確かに話を聞けば、誰それが飢え死にしたり戦死したり、暗い話が多ございますけれども、現地に現在20名ほどのワーカーが助っ人に行っていますけども、日本から来ているワーカーの方が暗い顔をしているんですね。「この哀れな人たちを救ってやらねば」と。一方、現地の人、特に子供は明るく、生き生きとしているんですね。この差はなんなのか？と日本に帰って思いますのは、人々の顔がなにか暗くて空虚なんですよね。なんでそんなに元気がないのか？と。日本も経済不況でどうのこうの、結構大変なんだと。ああ大変だな、食いものは食えないのか？とか、餓死者は何万人出たんだ？と言うと、餓死者はいないそうですね。その代わり自殺者は35,000人以上出るという、奇々怪々な社会になった。

現地にいて20年を振り返って思いますのは、はじめの頃はですね、困っている人々に手を差し伸べなければ、という思いあがった考えがなかった訳ではありませんけれども、振り返ってみますと、良かったな、と。日本にいる皆様には気の毒ですけども、この日本にいないで、現地に行って良かったなと、思うんですね。皆とは言いませんけれども、少なくとも一般の日本人が暗い顔をしている中で、私だけはそれから自由である。助けるつもりが、逆に助かったような気がして嬉しい。人間は、この最後の最後まで、食べ物も何もない、ないない尽くしの中でも人間は生きていける。その強さと同時に、最後まで失っちゃいけないものは何なのか、これは無くたっていいんじゃないか、と

いうものは何なのかということについて、一つの認識を得たような気がして、私は現地で働けたことに非常に感謝しております。

少なくとも今世界を覆っておる一つの迷信、金さえあれば何でもできるという迷信、武器さえあれば身は守られるという迷信。この迷信から、私たちは自由であります。こうやって、私たちがこの事業を通じまして、平和とは何なのか、人が本当に幸せに生きていくこととは何なのかというのを、竹槍などという物騒なものではなくて、荒野を緑野に変えることを実現いたしまして、私たちの竹槍にしたいと思っております。話が長くなりましたが、一応、私の話をこれで終わらせていただきます。どうも、ご清聴ありがとうございました。

《以下、質疑応答》

——素朴な質問ですが、水を引いて土地を潤すだけで、肥料は要らないんですか？

肥料は、向こうは買うお金がないですね。堆肥はある程度作れますけども、肥料はあまり使わない農業です。かろうじて窒素肥料が時々手に入るという程度で、それでも世界で一番大きなスイカが出来たり。やっぱり土地の条件が無機質だけではないのでしょうね。さらに、水路に密生して落葉樹を植えますと、その落葉樹が有機物を生産したりして、決してただの泥ではないな、という感じがしております。日本では有機栽培をすとかえって費用が高くなるそうですけれども、向こうでは肥料を買うお金がないので全部が有機栽培です。だから便所もないですね。というのは、日本も昔はそうでしたけども、人糞というのは貴重な肥料なんですね。そういうことで、特に肥料らしいものといえば堆肥、それから、牛馬の糞は燃料に使うので、人糞が主な肥料になりますかね。なんでも結構ですので、怒りませんので、質問してください。

——現地にいるといろいろなアイデアが湧いてくるのだろうかと思いながら聞いていました。たとえば現地での日本人の話し合いから出てくるのか、どうやって土木技術のアイデアが出てくるのでしょうか。

大抵は日本の、それも九州の私の家の近くで見た水利施設、これがネタです。

——中村さんの今までの知識があつて、それが活かされているのでしょうか。

というよりはもう、この用水路工事が始まって、まず自分の子どもの頃を思い出しまして。たとえば、海へ泳いでいけたこと。うちの周りは堤がいっぱいあるんですね。堤

で泳いだことはあるけれども作ったことはないな、ということで見に行ったりとか。あるいは、昔からある山田堰だとか八代の十連樋門、緑川の通潤橋…みんな九州ですよ。しかも、原型らしきものは現地にもあるんですね。なるほど、こうやって作ったなら納得ということで、簡単にいうと模倣するという形で、現地の人も納得、という形で技術移転が行われました。

さらに、現地の素材をどうやって生かすかという工夫もしてきたのですが、現地には石材は無限にあります。大きな岩から小さな砂利まで、タダで手に入る。その辺を掘れば、立派な土が出てくる。ただ日本と土質が違いまして、これをどうするかということで、細かい工夫はたくさんありましたけれども、ほぼ地元の素材を生かして、日本の技術と地元の技術をミックスして作った、ということでございます。若い人によく言いますが、勉強しすぎちゃいかんと。子どもの頃に遊びまわった経験、適当に野山を駆け巡って遊びまわっていた経験が、いま活かされているというのが本当でしょうね。

——世界にはアジアやアフリカでも支援を必要とする場所や人がたくさんあるなか、中村さんがあえてペシャワール地区に入っていかれたきっかけを聞かせてください。

これも、いつも出される良い質問で、「なぜアフガニスタンだけに集中するのか？」これは、本当は日本でもよかったんですね。めぐり逢いだとか、出会いだとか、古い日本の言葉で「縁」というものでありまして。たとえばですね、うちの患者が死ぬのと自分の子どもが死ぬのと、悲しさが違う。それだけの親密感というのは、私がアレンジしたもんじゃなくて、キリスト教的な言い方をすればですね、神様が与えてくれた一つの人間と人間の関係なんですね。その中で私たちは生きているわけで、このつながりを大切に、という以上のことはないです。たまたまこれがアフリカだったらどうなった？とか、おそらくそこに留まっていたでしょうね。日本だったらどうなのか。日本にいたでしょうね。例えば、ご結婚なさっていると思いますが、世の中は半分が女性で半分が男性であります。なぜその人があなたの奥さんでないといけないのか。これは考えてみたら分からないわけで、神様がそう出会わされたとしか言いようがないわけですね。それをやはり中心に、大切にしていって、というのが現地ばっかり力を入れるということになるんでしょうね。

私たちは国際医療協力の見本のように言われますけれども、決してそういうことはない。私は九州の北半分とアフガニスタンの東部しか知らなくて、それでいいじゃないかと私は思っています。一般的に人類を愛するために、世界中を救うことができるのか？私はそれはできないと思うんですね。かえってお節介。人類を、全世界を救うために爆

弾を落とす、全世界を救うために金をまき散らす、ということ以上にはできない。この国際協力のすべてが悪いとは思いませんけれども、そこに欠けてあるのは、そこに張り付いてじっと人々の生活を下の方から眺めて、そこで人々がどんなことで悲しみ、どんなことで喜ぶのか、その生き様を共にすることではないかと、私は思っております。

なぜアフガニスタンなのかというのは、さしたる理由はありません。私もよくわかりません。できたら家内が言う様に、「あげんところは早よう帰って来て、日本で勤務しとった方がまし」だなど、思わないでもありませんけども、目の前にいろんなことがあってですね、自分に何もできなければ別ですけれども、多少は打つ手があるのに、そこを放棄して出てくるのは、簡単に言うと「それでは男が廃るよ」と。この日本人としての気概、それ以外のものではない。いずれも非論理的な話で納得いかないと思いますが、動機は単純でございます。

——アフガニスタンから見て、今の日本に欠けるものはありますか？

これはですね、自分が欠けてるからよく分かりませんが。向こうと比べてまず欠けているのは、あったかい人間関係ですね。そのあったかい人間関係の中で、子供の生き生きとした笑顔も育ってくる。これがない。しかし、私たちの世代が幸せに思うのは、私たちは昔の日本の面影の残りかすを食って育った、ということに感謝しております。世の中が複雑になればなるほど、いわゆる個人主義が徹底すればするほど、個人主義が悪いとは言いませんけれども、自分のことさえよければいいという風潮がどこか蔓延った。向こうの人だって、皆自分のことが可愛くはあるけれども、困っている人がいたら恵んでやるのが当たり前。こういう世界なんですね。自分がごはんを食べて、人がご飯を食べてないのは、彼らは見ていて居たたまれない。通りがかりの人でも、「おい一緒に食べろ」と。こうやって、おいしいところだけ見れば、相互扶助が非常に徹底した社会。日本の個人主義の行きつく先の社会と比べると、私はなんとなく、日本はマニュアル的で冷たい感じがするんですね。みんな紳士的で上品で小綺麗にはなったけれども、冷たくていじめも増えておると、陰湿さが増しておるという感じが、皆じゃなくて、あなたが悪いと言ってるわけじゃなくて、私も含めまして日本人がだんだん人間らしさから退化していつておるといのは、言ってもいいんじゃないかなと思います。

改革、改革と言って、改革した挙句がまた新しいマニュアルをこさえて、ますます窮屈になっていく。政治家自身を見ていてわかる様に、国民の命を守るということではなくて、だんだん守らない方に行っている。こんな窮屈な国はないと私は個人的に思っております。そういうことを言いますと募金が減りますので、言いませんけども（会場

笑)。私はいずれ破綻が来るんじゃないかと思います。その証拠に、この人間関係の破綻によって若い人たちの行き場が失われて、そのためにこれだけの新興宗教が生まれた。

うちのワーカー、約 20 名の若者たちが現場で毎年汗を流していますけども、はじめは「大丈夫かな？こんなマザコンの塊のような青年に何が出来るのか」と思ったら、半年も経たないうちに苦虫を嘔み潰したようないい男になってきて、男らしくなってくるんですね。そうしてみると、今の若いもんはと言うてるけれども、それを作り出したのは大人だよって。環境あるいは社会が悪いか個人が悪いか、という話は昔からありますけれども、明らかに社会が悪い。置かれた環境によっては若い方も光る、ということを考えますと、そのあたりに今おっしゃった、今欠けているものが見えてくるんじゃないかな、という気がするんですね。その一つに、教育信仰というものもありまして、平均点がよければ、偏差値が良ければ、人間として優れておるような錯覚、迷信、これも取りのけなくちゃいけないものの一つじゃないかと思いますね。

決して、勉強がよく出来るからといって良い人間になるとは限りません。その証拠に、私たちが接する中で一番金にきたないのは、教育を受けた人たち。医者、まあ自分が医者ですから悪く言えませんけれども(会場 笑)、それから技師、こういった人はですね、良い待遇を受けて当然だということで、不平を募らす。一方、普通の百姓、運転手と呼ばれる人たちは、感謝してそれを受け止めた。ということを考えますと、教育がないということは良くないことですけれども、変にありすぎるのも良くないんじゃないかと。それでもって人の価値は定まらないというのが、現地で得た認識の一つでございます。答えになるか分かりませんが、私の実感としては、現地で働く若者たちの目を見張るような変化、その辺りにですね、日本に欠けているものが見えてくるんじゃないかなと、こう思うわけでございます。これでよろしいでしょうか。

2006年3月4日(土)

九州大学 YMCA100 周年記念会にて

